

1

改札口^{かいさつぐち}を出て腕時計^{うでどけい}を見ると、二本^{にほん}の針^{はり}は午後8時半を少し過ぎたところを指していた。おかしいなと思い、周囲^{しゅうい}を見回した。案^{あん}の定^{じよう}、時刻表^{じこくひよう}の上に取り付けられた時計は、八時四十五分を示している。浪矢貴之^{たかゆき}は口元^{くちもと}を歪め、舌打ちした。オンボロ時計め、また狂^{くる}ってやがる。

大学の合格祝^{ごうかく}いで父親^{ふい}かもらった時計は、最近になって不意に止まることが多くなった。20年も使っていれば当然か。そろそろクォーツに買い替えようかなと考えた。水晶発振方式^{すいしょう はっしん}の画期的^{かっき}な時計は、かつては軽自動車並^なみの値段がしたが、最近では急速に低価格化^{かかく}している。

駅を出て、商店街を歩いた。この時間になっても、まだ開いている店があることに驚いた。外から覗^{のぞ}いた限りでは、どの店もなかなかにはんじょう^{はんじよう}繁盛しているらしい。ニュータウンができて新しい住人^{じゆうにん}が増え、駅前商店街^{じゅうよう}の需要が高まった、と聞いたことがある。

こんな地方の、ぱっとしない街がねえ、と貴之は意外に思うが、生まれ育った土地^{とち}に活気^{かつき}が戻っているという話を聞いて悪い気はしない。それどころか、せめてうちの店もこの商店街の中にあつたならな、などと考えてしまう。

商店街の並ぶ通りから脇道^{わきみち}に入り、しばらくまっすぐ歩いた。すぐに住宅^たの建ち並ぶエリアに入った。この辺りは来るたびに景色^{けしき}が少しずつ変わる。新しい家が次々と建っていくからだ。それらの住人^{じゆうにん}の中には、ここから東京まで通勤している者も珍しくないという。特急電車を使っても、二時間はかかるだろう。自分にはとてもできない、と貴之

は思った。彼の現在の住まいは都内の賃貸マンションだ。狭いながらも2LDKで、妻と十歳の息子と三人で暮らしている。

しかし、と思い直した。ここから通うのは無理だが、立地条件について、ある程度は妥協する必要はあるかもしれない。人生は、自分の思う通りにならないことの方が多い。通勤時間が延びるぐらいのことは我慢すべきだろう。

住宅地を抜けると、T字路に出た。右折し、さらに歩いていく。緩やかな上り坂だ。この辺りなら、目を瞑っていても歩ける。どれだけ歩けば、道がどの程度に曲がっていくか、体が覚えている。何しろ、高校を卒業するまで通った道だ。

やがて右前方に小さな建物が見えてきた。街灯は点っているが、看板の字は煤けていて読みにくい。シャッターは閉まっていた。

店の前で足を止め、改めて看板を見上げた。ナミヤ雑貨店—近づけば辛うじて読める。

隣の倉庫との間に、幅一メートルほどの通路がある。貴之は、そこから店の裏側に回った。小学生の頃は、ここに自転車を止めていた。

店の裏には勝手口があった。ドアのすぐ横に牛乳箱が取り付けられている。牛乳を配達してもらっていたのは、十年ほど前までだ。母親が亡くなって、しばらくしてからやめた。しかし牛乳箱はそのままだ。

牛乳箱の脇にはボタンが付いている。押せば、昔はブザーが鳴った。今は鳴らない。

貴之はドアノブを引いた。やはり抵抗なく開いた。いつもこうだ。

靴脱ぎには、見慣れたサンダルと、古びた革靴が並んでいた。どち

しもゆうしゃ
らも所有者は同じだ。

今晚は、と低く声をかけた。返事はなかったが、構わずに進んだ。
靴を脱ぎ、上がり込んだ。入ってすぐのところが台所だ。その先には
和室があり、さらにその向こうが店舗になっている。

雄治は和室で卓袱台に向かっていた。股引にセーターという出で立
ちで、正座をしている。そのまま顔だけをゆっくりと貴之の方に向け
た。老眼鏡を鼻先にずらしている。

「何だ、おまえか」

「何だ、じゃないよ。鍵がかかってなかったぞ。戸締りはきちんと
しろって、いつもいっているだろ」

「何か聞こえてたが、考え事をしてたので、返事をするのが面倒だっ
たんだ。」

「また、そういう負け惜しみを」 貴之は持参してきた小さな紙袋を
卓袱台に置き、胡座をかいた。「ほら、親父の好きな木村屋のあんぱん
だ」

おう、と雄治は目を輝かせた。「いつもすまん」

「別にいいよ、これぐらい」

雄治は、どっこいしょと立ち上がり、紙袋をつまみ上げた。すぐそ
ばの仏壇は扉が開いたままだ。そこの台にあんぱんの入った袋を置く
と、立ったままで鈴を二度鳴らし、元の場所に座った。小柄で痩せてい
るが、八十歳近くになっても姿勢だけは良い。

「お前、晩飯は食ったのか」

「会社の帰りに蕎麦を食った。今夜はこっちに泊まるから」

「ふうん。芙美子さんにはいってあるのか」

「ああ。あいつも親父のことを心配してたぜ。体調はどうなんだ」

「お陰様で問題ない。わざわざ様子を見にきてもらうまでもない」

「せっかく来てやったのに、その言い方はないだろ」

「心配無用と言ってるだけだ。ああそうだ、さっき風呂に入って、湯はそのままにしてある。まだ冷めてないだろうから、好きな時に入れればいい」

会話の間中、雄治の視線は卓袱台の上に向けられていた。そこには便箋が広げられている。傍らに封筒が置いてあった。表書きは、ナミヤ雑貨店様へ、となっている。

「それ、今夜来たのか」 貴之は訊いた。

「いや、届いたのは昨日の深夜だ。朝になって、気づいた」

「それなら、今朝、回答しなきゃいけなかったんじゃないのか」

『ナミヤ雑貨店』への悩み相談の回答は、翌朝牛乳箱に入れられる——それが雄治の作ったルールのはずだ。そのため雄治は午前五時半には起きる。

「いや、夜中だということで相談者も気を遣ったらしい。回答は一日遅れでいいと書いてある」

「ふうん、そうなのか」

おかしい話だ、と貴之は思った。なぜ雑貨屋の店主が、他人の悩み相談に応じねばならないのか。もちろん、こうなってしまった経緯はわかっている。何しろ、週刊誌が取材に来たほどなのだ。あの直後は相談件数が増えた。真面目な内容もあったが、多くがふざけたものだった

た。明らかに嫌^{いや}がらせと思われるものも少なくなかった。極めつけは一晩で三十通以上の悩みが持ち込まれたことだ。明らかに一人の手によるものだった。内容は全てでたらめなものだった。ところが雄治は、それらにさえも回答をしようとした。さすがにその時には、「やめろよ、そんなこと」と貴之は雄治にいった。